第八章　射精する性

――男性のセクシュアリティ言説をめぐって――

田中雅一

「男として、射精は性交の究極だ」（ハイト　一九八二、一一四頁）

「男の価値の第一は精力家であること。ペニスを力強く勃起させて妻を喜ばせることができなければ、男として見放されてしまう」（阿部　一九九七、一二頁）

一　性科学書・性マニュアル

本章で目指すのは、男性（とくにヘテロセクシュアル）の性体験の中核に位置する勃起、射精、それによって排出される精液についての支配的な言説の分析を通じて、それが前提とする男性像を明らかにするとともに、新たな男性セクシュアリティの可能性を探ることである。まず一般向けの性科学書・性マニュアル、つぎにポルノグラフィーを検討する。

成人男性の性欲や勃起、射精、精液はきわめて「自然」な過程であり、このどれかが欠けていても「病気」である。精液は睾丸で自動的に生産されてたまっていく。射精が三日周期であるという言説は古くか

らある。精液が三日で満タンになるからこれを排泄しなければならない（小田　一九九六、一一頁）。これは放っておくと性欲が増し、精夢で放出される（夢精）。それを避けるためには定期的に吐きだす必要がある（自慰・買春・強姦）。

このような男性のセクシュアリティについての考えは根強い。たとえば一九八〇年と八一年の調査をまとめた『モア・リポート』で二〇歳の女性は、「自分が欲していない時、パートナーからセックスを求められたらどうしていますか？」という質問に、「時によって応じます。男性って女性と違ってある程度精液がたまるとセックスせずにはいられないでしょう。そんな時、「私、イヤ」って一方的に断るのもかわいそう。生理上しかたがないもの」と答えている（モア・リポート班　一九八七、五一―五二頁）。

この自然化の言説の延長線上に生理的な欲求に基づく排泄行為としての性行為という語りが位置する。そこでは女性は便所あるいは（ふしだらとされる女性や売春婦については）公衆便所にたとえられる。そして、性行為自体が女性を辱め、汚す手段として位置づけられる。そこでは性行為はしばしば暴力的な形をとり、それが男性の快楽であるだけでなく、女性にとっての真の快楽でもあることが強調され、その結果男性の暴力が容認される。本論ではこのような排泄としての射精およびそれを前提とする自慰、買春、強姦などをめぐる男性のセクシュアリティ一般についての言説を「排泄‐支配系言説」とよぶ。

だが、現代ではもはや女性を便器のように取り扱うわけにはいかない。一晩に何回も射精をしたり、何人もの女と寝ることではなく、女性に深い快楽を与えることこそ男性性の証明となっている。なるほど射精は「性交の究極」で、女性はその手段にすぎないかもしれない。が、冒頭に引用した阿部の文章からも分かるように、重要なのは長時間勃起するということと、女性に快楽をもたらすさまざまな技巧である。このような言説をここでは「排泄‐支配系」に対して「快楽‐支配系」とよぶ。女性に快楽を与えるため

に自身の欲求充足を遅延する、与えること自体が自らの快楽となり、女性の支配に通じるような態度をめぐる言説である。勃起不全（インポテンス）にくわえて短小や早漏、その原因とされる包茎が問題視されるのも、すべてそれらが女性を十分に満足させないという結果を生むからである。排泄－支配系と快楽－支配系言説の基本的な相違は、前者が男性中心的、後者は女性中心的ということだが、後に見るようにこの二つは根本的に対立する言説として対比されることは少ないし、さまざまな次元で矛盾の解決が試みられている。この点をことわったうえで以下、勃起、射精、精液についての医学的言説を吟味する。

まず勃起についての一般向けの医学書『男と女事典――SEX のすべてがわかる』の言葉を紹介しよう。

「大きいペニスの持ち主が精力が強いとは必ずしも言い切れないのです。それより重要なことは、勃起力です。勃起力とは、拡張力、硬さ、勃起角度を総合したものをいいます。……性的結合の際、膣との角度の関係から、ペニスが水平より上向きになっているほうが好都合といえます。ペニスが上向きの角度であれば、亀頭が膣の前壁に突きあたり、いくぶん下向きにさせられるため、刺激が強まり勃起を長引かせることができるからです。……さらに勃起の角度は硬度に比例します。硬い人ほど角度が高く、それだけ女性を喜ばせることができるというわけです」（外森　一九八九、二一―二二頁）。

ここでは勃起――その角度、持続性、硬さ――が女性を満足させる能力と関連づけられて論じられていることに注目しておきたい。そして、勃起は男性の力を象徴する。「勃起力、拡張力、持続力、回復力」（外森　一九八九、二〇―二四）、「男根の拡張力、貫通力、発射力」（レオナード　一九八六、一八五頁）など、男性のセクシュアリティについての表現には、「力」という文字があふれている。この力こそ女性に対する男性の権力である。「男性の権力よ永遠なれ！　勃起したペニスよ永遠なれ！」というわけだ。だが、この力はたんに快楽を与える力を意味しない。排泄－支配系言説においては、それはまさに女性を

屈服させる武器＝力なのである。

このように考えると、勃起と射精とのまなざしの相違が明らかとなろう。とくに快楽‐支配系の言説の場合、（先の引用でいえば発射力を体現しているとはいえ）射精は勃起の終焉であり、性行為そのものの終止符である。その意味で勃起が象徴する男性らしさの否定を意味する。射精は男性性の永遠さを示唆するというよりはそのはかなさ、一過性を知らしめるのである。男性にとっての性的快楽は射精そのものにあるといっても間違いはないだろうが、それは快楽を与える存在たる男性性の否定を意味する。

射精はしたがって快楽‐支配系言説においては否定的な生理現象ということになる。『男と女事典』には射精についてのまとまった記述はないため、類似の医学書から引用することにしよう。

「……さらに興奮するとオーガズム期に入り、副睾丸が収縮して精子が精嚢腺にたくわえられます。この瞬間、男性はもう射精したいけどまだ我慢できるとわかります。……そしてついにガマンできなくなったときが、射精の瞬間です。精子は尿道を通り、亀頭を通過して噴出します。この瞬間、ペニス全体がいっきに収縮して、激しいオーガズムが身体を貫きます。このときの収縮は〇・八秒間隔で数秒続きます。ほんの短い時間ですが、一瞬とも数分とも思える、時間を超越したエクスタシーが得られるのです。絶頂期に達してからもふたたび快楽への階段をのぼれる女性と違い、男性器は射精後徐々に元へ戻るだけ。これが退消期です。収縮していた睾丸は伸び、ペニスも陰嚢もやわらかくなっていきます。……〔挿入後〕射精までの時間の平均は約五分。射精される精子の量は1cc—6ccです」（志賀　一九九五、一三一—一三三頁）。

「男性の六〇％は「自分のオーガズムは単調で瞬間的である」と思いこんでいる。たしかに肉体の反応も全身的なものではなく、女性のオーガズムとは比較にならないほど部分的に起こる感覚である。肉体に

起こる男性の性的反応は、興奮期、平坦期、オーガズム期、消退期の四段階に分けられる。射精過程の第一の特徴は精液を排出するために各器官が収縮し、精液が尿道前立腺に集まるのだが、この段階で男性は、それまで我慢していた射精をもはやこれまでと感じるようになる。第二の特徴は、尿道括約筋の収縮と精液がかなりの圧力により、尿道海面体部を尿道口に向かって射出されていく感覚である。量が多ければ多いほど、強烈なオーガズムが得られる」(加藤　一九九一、七六―七七頁)。

上記の二つの引用文はともに、射精による男性のオーガズムが部分的・瞬間的なものであるということを示している。そして射精について我慢ということばが(はからずも)使われていることに注目したい。このような客観性を重んじる記述においてさえ、持続的な勃起と性交によって女性を喜ばせなければならないという男性の側の義務感が認められるのである。「夫と妻とが一緒にクライマックスをむかえられたらベストだ」とか「妻がいいというまで射精したことがない」「女性がオーガズムに達していいとシグナルを送るまでは射精すべきでない」など、『ハイト・リポート　男性版』(ハイト　一九八二、一一〇―一一三頁)にもそのような男性の意識が生き生きと描かれている。

加藤が右に述べているように、射精時に排出される精液の量は男性自身の快楽に関係するであろう。また、それが女性の快楽にも結びつくかもしれない。

「たっぷりと精液があると、性感も豊かになり、それだけ勃起力を高めることにつながると考えられます」(外森　一九八九、二三頁)。

その結果女性も満足する。だが、これは、精液そのものの価値を示しているのではない。排泄-支配系の言説にあっては精液は男性による女性の支配を示す手段であり、また痕跡であるが、快楽-支配系の言説において射精や精液が中心的な役割を果たすことはほとんどない、といってもいいだろう。それは、欲

しない妊娠を引き起こすものであり、ベッドシーツを汚すもの、そしてオーラルセックス時においてはとても飲み込める代物ではない(1)。

しかし、過去には射精もまた女性に快楽を与える重要な要素とみなされていた。そして、一般的ではないにしても現代でもそのような証言に出くわす。

『完全なる結婚』の著者ヴァン・デ・ヴェルデは、女性はしばしば射精と関係なくオーガズムに達することを認めているにもかかわらず、「正常な夫婦の交わり」では射精が女性のオーガズムの重要な要素である、と主張する。一つは射精時に生じるペニスの筋肉の収縮、もう一つは精液の膣壁への衝突である（ヴァン・デ・ヴェルデ　一九八二、二二五頁）。したがって、中絶性交（外出し）は女性に快楽を与えない不完全なものとしてきびしく非難されている。

また『ハイト・リポート　男性版』にも「僕の経験によれば、女の子は、男が中でロケットを打ち上げるとうれしがって射精している間すごくいい感じだと口で言ったり、動いて見せたりする」という証言がある（ハイト　一九八二、一一七頁）。ここでは射精や精液が女性の快楽を誘発するものとしてとらえられている。

二　ポルノグラフィー

男性のセクシュアリティをめぐる言説はポルノグラフィーと密接に結びついている。というのも、定期的な排泄手段と位置づけられた自慰に必要なのがポルノグラフィーだからである。ポルノの中では女もま

た男なしでは我慢できない依存的な存在である。男が求め、それ以上に女が求めている。これがポルノが描く「真実」である。男性のセクシュアリティについての言説は、女性についての一面的な――男性にとって都合のいい――言説を生み出している（田中　一九九七）。

マーカスはポルノグラフィーの古典的研究『もう一つのヴィクトリア時代』において、『好色なトルコ人』を分析しながら、そこで描かれている男性のセクシュアリティの中心観念は女性をペニスで支配することであり、その中心的な役割を果たすのが「無限の力をもった魔法の道具」（マーカス　一九九二、三七三頁）であるペニス（厳密にはファロス）だ、と指摘している。

マーカスの所説に依りながら、北山も「ポルノにおいて男性は永遠に勃起する終わり無きペニスの所有者として描かれている」（北山　一九九四、四二頁）と述べる。それは超男性であり、ファロス（陽根）そのものなのである(2)。ヴィクトリア時代におけるこうした勃起中心の言説は現代のポルノグラフィーと酷似している。だが、今日では、強姦を題材とする排泄-支配系言説だけでなく、快楽-支配系言説も顕著である。

快楽-支配系言説を強調する現代のポルノグラフィーにあっては、快楽を与え続けるペニスが具体化したものがバイブレータだ、ということもできよう。それは、勃起が永遠に続かないこと、したがって男性性のはかなさをみずから認めているといえる。しかし、ポルノグラフィーにおいては強調されるのは無理を欲する女性の性である。女性のあくなき欲求の証としてバイブが現れる。しかも、それはあくまで代理であって「本物」にはかなわない（ということになっている）。

射精は勃起の終焉を意味し、多くの場合性行為そのものに終止符を打つ。したがって、ポルノグラフィーの支配的な語りを裏切るものなのである。

「それ（射精）は男性が女性にたいして行う男性中心の性のイデオロギーがしばしば主張している、占有、貫通、所有という行為に失敗した結果得る欲望を表しているにすぎないのだ」（Williams 1989, p. 113）。

そのためポルノグラフィーで強調されるのは男性のオーガズムとしての射精ではなく、精液を受けることもまた女性の快楽であるというメッセージである。映像に限れば、それはカム・ショット（cum shot）あるいはマネー・ショットとよばれる描写であり、ペニスとその先から放出される精液、口を大きくあけてそれを受け取ろうとする（恍惚状態にある）女性の顔が描かれている。日本では顔射という行為に近い。カム・ショットや顔射では男性の快楽は女性に転移されている。男性のオーガズムを引き起こす射精さえも、ここではその主体が入れ替わっているのである。そこにあるのは男が与えるものはすべて女性にとっての快楽であり、女性はそれなしには性的に満足ができないという一方的な言明なのである(3)。

厳密に言えば、カム・ショットはフェラチオとは異なるが、両者の類似性は注目に値する。後者の場合もまた快楽を受けているのは男性であるが、ポルノグラフィーにおいては、フェラチオを求めているのは女性であり、フェラチオによって快楽を得ているのは女性なのだ。しかし、それだけではない。精液を顔や口に受けるということ、それは男女間の力関係を確認する行為でもある。

「精液を飲み込むのは、女性にとっては茨の道だ。……飲み込め飲み込まないの裏には、男女のパワーゲームが隠されているようだが、それはともかく、自分のしたくないことを無理にする必要はない」（アンダーソン&バーマー　一九九八、一〇六―一〇七頁）。

それは、女性を辱めるような排泄-支配系言説である。さらに言えば、顔射やフェラチオにおいては排泄-支配と快楽-支配という二つの言説が重なると言える(4)。

マーカスはポルノグラフィーにおける大量の精液についての描写にも触れている。

「〔性を中心に世界が組織されている〕ポルノトピアを構成するもう一つのファンタジーに、精液がある。『ある外科医の好色な体験』は、このアイデア例に満ちあふれている。語り手は、「彼女の小さな胃（膣）から太腿まで、精液のまさに超自然的な大洪水でびしょ濡れにした」と書いている。彼は、「湯気の立つ勝利の跡」を注意深く除けながら起き上がった。また別のところでは、「……私のブリックは、彼女の体の奥深くを貫き、精液が洪水のようにあふれ出した」。そうして水浸しにされた女が立ち上がった時には、「ポタポタと大きな音を立てて、精液がカーペットの上に落ち、彼女の美しい内腿に、精液が伝い流れていた」。……彼〔語り手〕は自分自身のことを、「もっとも多量の精液のシャワー」を降らせることができるものと豪語している」（マーカス　一九九二、四二一―四二二頁）。

つまり、ここでは精液の量が勃起に代わって男らしさの記号となっているのである。これについてマーカスは、当時の精液の放出を浪費とみなす医学的見地にたいするユートピア的言説として意義があると述べている。

類似の描写は現代のポルノ・ビデオにも認められる。その典型は一九九五年から始まった『ざーめんくらぶ』（Maniac Video）シリーズである。性行為はあくまで二次的なものにすぎない。バケツ一杯の精液（とおぼしきもの）で女性の体は頭からすっかりまみれてしまう。あるいはフェラチオによる数分毎の射精で精液まみれになる女性。精液を体中に――ほとんどの場合着衣のまま――浴びせられ、徹底的に辱められる無力な女性。そしてそれを快楽として自慰を始める女性。ここでは精液は少量の希少価値の液体――生殖、男性の快楽、性交の終焉の記号――ではない。それは大量に女性に襲いかかる、まさに暴力的な男性そのものを象徴している。そして、ここに作用しているのは圧倒的な男性の側の力、それもほとんど

終わりのない力なのである。

ポルノグラフィーにはさまざまな言説が含まれている（McNair 1996, pp. 91-93）ことを認めたうえで、以上述べてきたことの背後にある一般的な図式をあえて呈示しておきたい。快楽－支配系言説にはつぎのような二項対立が認められる。

男＝快楽を与える身体　対　女＝快楽に身をまかす身体

性的快楽とはコントロールを失って、すなわち自己を喪失（エクスタシー）することで獲得されるとするなら、この図式はつぎの二項対立に置き換えることが可能だ。

男＝コントロールする存在　対　女＝コントロールされる存在

コントロールできる存在こそ「主体的」存在であり、他者を、そして世界を支配できるのである。この図式において射精は、主体性の放棄として隠蔽されなければならないのである。換言すればコントロールとはなによりも自由に射精の瞬間をコントロールすることにほかならない。

「彼女（彼女たちかな？）にインしてイッいかなる状況下でも、キミの完全なる意志のみがオチンチンに発射命令を下せる。これが絶倫男の条件なのだ」（Hot Dog Press　一九八六、一四五頁）。

「（ポルノグラフィーの）焦点は彼のペニスに定められている。「男」としての彼の立場は自分の思うがままに性的に振る舞うこと、そして自由に射精できること、という能力によって意味づけられている。彼の地位や力を意味づけるのはこの〔神秘的な〕能力である」（Ussher　1997, p. 164）。

男性にとっての性的快楽とはここで「支配する」ということと等価になる。

これにたいして、排泄－支配系言説はもっとストレートである。ここでも男性が主導権を握る。相手の女性は排泄物としての精液を受け止めるモノへと変容する。

それではこれら二つの言説には矛盾は存在しないのだろうか。男性が自らのセクシュアリティをコントロールするという快楽-支配系言説は、セクシュアリティがきわめて自然なものである、だから射精を我慢できない、という排泄-支配系言説と矛盾していないだろうか。そんな男性がどうして性交の最中女性をコントロールできるといえるのだろうか。勃起こそ男の無力さ（田崎　一九九三、五五―五六頁）の象徴ではないのか。だが、勃起不全（意に反して起たない）や早漏（意に反して終わってしまう）が問われることはあっても、意に反する勃起が問われることはない。そして、男性の我慢のなさが、「男らしい」価値ある行為――リードがうまい、積極的だ、頼りになる――として賞賛される。また、性交が始まると快楽に専念して急速に自制を失うのは女性である、という説明も可能だ。たしかに、そのようなプロセスこそポルノグラフィーが好んで取り上げる主題であった。しかし、矛盾とされない最大の理由は男性像が不問にされ、女性が排泄-支配系言説においても快楽を得るとされるということである。快楽-支配系言説の激しく快楽を求める女性像と、排泄-支配系言説の恥辱を快楽とする女性像はみごとに重なるのである。

三　相互行為としての射精

前二節では医学書やポルノグラフィーを参照しながら男性の性をめぐる言説を吟味してきた。快楽-支配系言説では勃起が特権的な地位を占め、射精はほとんど語られていない。あるいは射精は描写されていても男性の快楽の体験として語られてはいない。それは男性のオーガズムではなく女性のオーガズムを誘

発する要因である。排泄-支配系言説での勃起、射精と精液は、男性と女性とのより一方的な力関係を示唆するものにすぎない。

しかし、性交はきわめて相互行為的（インタラクティヴ）な行為である。そこではたして男性の快楽は隠蔽されているのだろうか。射精はどのように経験されているのだろうか。以下ではわたし自身が行った予備的な調査の結果を検討したい。これらは原則として私の周りにいる大学関係者へのアンケートによる調査であった。

調査にあたっては回答者が男性（七名）と女性の場合（八名）、あるいはゲイの場合などで設問を少し変更している。ここではゲイへのアンケート結果は考慮しない。調査のポイントは射精時にどのようなコミュニケーションがなされているのか、あるとすればそれが状況によって異なるのかである。ここでいう状況とは、膣内射精、自慰による射精（相手の眼前やテレフォン・セックス）、フェラチオ、中絶性交（外出し）などである。

回答者は女性八名の内一名が三〇代、七名が二〇代、男性は四〇代二名、三〇代一名、二〇代四名である。問いの対象となった男性数は、回答者を含めると五〇代が二名、四〇代が三名、三〇代が三名、二〇代が九名の計一七名である。

◇射精の瞬間はあなた（女性）にとって快楽ですか。

回答者の女性八名が一〇名の男性について答えた内訳は、快楽を感じるが四名、三名が感じない、三名が不明（無回答）であった。

◇膣内射精の時（コンドームの装着を含む）射精時に声をかけるか、合図をするか、なにもしないか。

男性一七名中一一名が言葉や合図で射精を相手に知らせている。このうち、三名が「いってもいいか」

という許しの問いである。他は一方的な通告か身振りである。

同じ相手とのテレフォン・セックスや相手の前での男性の自慰については、経験のある九名の男性の内六名が相手の名前を呼んだり、「出しちゃう」「いく」という声をかけている。相手の手による射精では、一四名中一三名が合図をするという高い確率になっている。「出そうだ」「いく」と述べたり、手で相手の動きを止めたりする。フェラチオによる射精も一四名の内一二名に合図がある。ここで注目したいのは、膣内射精ではコミュニケーションをもたなかったカップルでも、相手の指やフェラチオの場合には、声やジェスチャーで射精を知らせる男性が三名増えている点である。その反対はない。

ここではこれ以上詳しい紹介は控えるが、この簡単な調査から明らかになるのは、射精時にはカップルの間にはなんらかのコミュニケーションが成立しているということである。そして、それは相手の手や口で行われる射精の場合さらに確実なものとなる。その理由を推察すると、これらの場合男性が完全に相手に身をまかしているという事実に理由を求めることができる。相手のことを考えて射精を我慢する必要はないのである。したがって、そこで発せられる言葉もストレートなものになっていて、許しを乞うという形を取ってはいない。これに関して、『ハイト・リポート　男性版』で「あなたはフェラチオ、マスターベーション、性交で得たオーガズムのうち、どれが最良のものだと思いますか」という設問への回答が興味深い。というのもそこでフェラチオと答えた理由として、相手のことを考えないで自分の快楽の充足に専念できる、と回答していた男性が数人いたからだ（一九八二、八六頁）。つまり、ここではまさに受け身の快楽がストレートに表現され、排泄-支配系言説とも快楽-支配系言説とも異なる快楽の回路が示唆されているのである。

四　失神する男性

前節で射精に注目し、それが多様な相互作用の中で実現することを指摘しようとしたのも、一方的な力関係にこだわらない男性の快楽に注目したかったからである。もちろん、多くの性産業において男性は受け身であり、受け身であることこそより男性中心ではないのか、という疑問も湧くかもしれない。だがここで述べているのはあくまで男女間のインタラクティブな関係の一つとしての受け身であるということを強調しておきたい。

こうした視点から特筆すべきなのは、ポルノ・ビデオの世界においても徹底的に受け身な男性が描かれ始めているということだ。その典型は代々木忠による一連のビデオ作品で、そこでは男性も快楽の果てに失神する。しかもそれはかならずしも射精をともなわない。男性性の証明でもある性行為での暴力性、能動性や支配欲を放棄するだけでなく、射精をも放棄することで得られる快楽とはどのようなものなのか。代々木の思想（代々木　一九九三、山田　一九九五）は別のところで改めて論じることにして、少し長いが、失神した男優の手記を最後に引用しておきたい。

「ボクは四年前、代々木監督の『いんらんパフォーマンス　密教昇天の極意』という作品で、イクということをはじめて体験した。この作品は、男のオーガズムを追求するという意図でつくられたものだった。……ボクと相手役の栗原早紀は、いつにも増して、自分の中へ中へと意識を下ろしていった。努力することを放棄して、期待することを放棄して、とにかくあらゆる意識を放棄して、同じ殻の中にいることを実

感として感じながら求めあった。ほどなくして、意識が性器からふっと離れたとき……。そこからの記憶がない。何をどうして、自分がどうなっていたのかがまったくわからなくなってしまった。ただ、たとえようのない快感、幸福感に包まれて浮かんでいた。射精とはまったく違う感覚。それとは較べようもないほどの満足感と充実感で身体が満たされているのを実感した。性別をこえた快感。根拠はないのだが、そう実感できた。……栗原早紀がこういった。「鷹、おぼえてる？　わたしがおちんちんさわろうとしたら『さわらないで。そのまま抱きしめて』っていったのよ」まるで記憶になかった。ボクの性器は、これ以上は小さくなれないほどに縮み上がっていて、射精もしていなかった。身体中に鳥肌がビッシリと立っていた。気がつくと涙もこぼれていた。男の幸福感はかならずしも射精にあるわけではなかった。性器を使わなくても達するセックスがある。予想していたこととはいえ、ショックだった。と同時に、ことばにあらわすことができないほどの至福のときに包まれてもいた」（加藤　一九九四、一三一―一三三頁）。

これは極端な例かもしれないが、脱性器的なオーガズムを主張する人々も現れている(5)。そこで語られる男性のセクシュアリティはもはやポルノや医学の言説と同一ではない。他者＝女性を辱め、支配し、あるいは自制するところから生まれる男性の快楽とは別の快楽の回路――脱ファロスの回路――にこそ注目しなければならない。こうした動きにこそ新たなセクシュアリティ観に根ざした男性論の可能性が隠されているはずだからである。

（注）

（1）一般に精液が問題となるのは、男性の生殖能力との関係においてである（北原　一九九九）。「種なし」とは今日でもなお男性を侮蔑する言葉である。それは真の男に値しない、ということを意味する。具体的な性

行為における男性と女性との力関係を考える上で生殖は無視できない要素だが、本章では生殖については触れることができなかった。

(2) 本章では「超男性的」男優が演じるポルノグラフィーが一般男性にもたらす不安について議論する余裕がなかった。

(3) マックリントックは、カム・ショットが基本的に自慰であるゆえ、女性とのセックスの放棄を意味する、したがってファロスによる女性の支配、同時的な快感の増大、というポルノの言説に矛盾すると述べている(McClintock 1992, p. 123)。しかし、この矛盾はカム・ショットが転移によって女性になお快楽を与えている、とするなら解決することになる。

(4) ここで思い出されるのはハロルド・ロビンズの小説『グッバイ・ジャネット』のつぎのような場面だ。ジャネットの母は巨大なペニスをもつ新しい男を誘惑するのだが、彼女を待ち受けていたのは、ホモ・セクシュアルを公言する彼からの放尿であった。ここで射精は放尿に転換し、ペニスは喜びではなく屈辱を与える道具となる。だが、通常のセックスにおいても精液を受け取ることが屈辱(暴力)ではないという保証はどこにもない。またポルノ・ビデオのいわゆる「中だし」(膣内射精)シリーズもまた、膣内射精こそ女性にオーガズムを誘発するという主張に留まらず、排泄-支配系言説の例として解釈することも可能である。

(5) 射精が男性のオーガズムと同義ではない、それをこえてよりよい快楽を得ることが可能である。この点については Chia and Arava (1996) を参照。小田も男性の能動性と密接に関係する性器中心の快楽にたいして、受動的で全身的な快楽を対峙させている(小田 一九九六、九二—九六頁)。

(参考文献)

阿部輝夫『セックスレス・カウンセリング』小学館、一九九七年。

アンダーソン、ダン&マギー・パーマー『マギーが教わったこと——GAY に学ぶ、愛の技術(ラブテクニック)』柏木千春訳、飛鳥新社、一九九八年。

ヴァン・デ・ヴェルデ、T・H・『完全なる結婚』安田一郎訳、河出文庫、一九八二年。

小田亮『性――一語の辞典』三省堂、一九九六年。
加藤大貴『性のクリニック報告』笠倉出版社、一九九一年。
加藤鷹『イケない女神たち――AV男優のセックスノート』コスモヒルズ、一九九四年。
北原恵「境界撹乱へのバックラッシュと抵抗――「ジェンダー」から読む「環境ホルモン」言説」『現代思想』青土社、一九九九年一月号、二三八―二五三頁。
北山晴一『官能論――人はなぜ美しさにこだわるのか』講談社、一九九四年。
志賀貢『愛される愛し方――ドクター志賀の秘密のテキスト』ぶんか社、一九九五年。
外森憲作『男と女事典――SEX のすべてがわかる』西東社、一九八九年。
田崎英明『文芸スペシャル2　セックスなんてこわくない――快楽のための7つのレッスン』河出書房新社、一九九三年。
田中雅一「世界を構築するエロス――性器計測・女性の自慰・オーガズム」『岩波文化人類学講座　個からする社会展望』岩波書店、一九九七年。
ハイト、シェアー『ハイト・リポート男性版　中』中尾千鶴監訳、中央公論社、一九八二年。
Hot Dog Press 編『ホットドッグブックス4　いま堂々と読む SEX BOOK――The BIBLE for Adam & Eve A to Z』東都書房、一九八六年。
マーカス、スティーヴン『もう一つのヴィクトリア時代――性と享楽の英国裏面史』金塚貞文訳、中公文庫、一九九二年。
モア・リポート班編『モア・リポート――女たちの生と性』集英社文庫、一九八七年。
山田陽一『愛の学校――代々木忠の世界』夏目書房、一九九五年。
代々木忠『オープンハート』情報センター出版局、一九九三年。
レオナード、ジョージ『エンド・オブ・セックス』スワミ・プレム・プラブッダ訳、工作舎、一九八六年。
Chia, Mantak and Douglas Abrams Arava: *The Multi-Orgasmic Man: The Sexual Secrets That Every Man Should Know*. Thorsons, 1996.
McClintock, Anne: "Gonad the Barbarian and the Venus Flytrap: Portraying the Female and Male

Orgasm." In Lynne Segal and Mary McIntosh, eds., *Sex Exposed : Sexuality and the Pornography Debate*. Rutgers, 1992.

McNair, Brian : *Mediated Sex : Pornography and Postmodern Culture*. Arnol, 1996.

Ussher, Jane : " The Case of Lesbian Phallus : Bridging the Gap between Material and Discursive Analyses of Sexuality." in Lynne Segal, ed., *New Sexual Agendas*. Macmillan, 1997.

Williams, Linda : *Hard Core : Power, Pleasure, and the Frenzy of the Visible*. University of California Press, 1989.